

## 児童福祉における感性の問題

野 口 栄 子

Role of sensibility in the child welfare

EIKO NOGUCHI

### 序

児童福祉とは、わが国では昭和22年の児童福祉法制定の前後から、やかましく論じられるに至った問題である。しかしながら、児童の福祉に関する問題は、決して戦後にはじまったものではない。われわれは、古来からさまざまな形式で、児童の福祉について考察したり、実践したりしている。けれども、それらの問題は、数多の重要なテーマや課題を蔵しているにもかかわらず、現在、まだ明確な姿をとつていないとはいえない。児童福祉の問題は、わずかな定義や解釈、現場の実践記録といったものの範囲に固着して、体系的な理論を構成するに至っていないのである。だが児童福祉の現場は、次々とその活動範囲をひろめ、また世間の要請もそれにつれて増大している。そのようなときにあたつて、われわれは、児童福祉の問題について、その本質的な意味や課題を確認する必要がある。私はそのような観点から、児童福祉の今後の問題展開にとって、中核となるべきだと考察される感性の問題について、この小論で検討したい。感性の問題は、いままで児童福祉にとって、全く無関係であるか、もしくはごく一部の孤立した範囲を形成するものと考えられがちであつた。しかしながら、私はこの方向を全面的根柢的に志向することなしには、児童の福祉の問題は発展しえないものであり、この点への注目こそ、現下の児童福祉にとって急務であると考えられるものである。以下その点に関していささかの問題展開を試みたいと思う。

### （１）

児童福祉という分野が、戦後とくにわれわれの関心をひくようになった状況について、厚生省児童局長黒木利克氏は、次のような適確な説明をおこなつてられる。「…明治維新以来西欧の思想の影響をうけて児童に対する考え方も改り、社会的な規模において児童の保護が図られるようになった。その対象とされた児童も孤児などの従来から保護の対象となつて来た児童のみでなく精神薄弱児などにまでおよび、さらには資本主義経済の高度化に伴ない労働している児童の保護が図られるようになった。しかし、一般の児童の福祉が図られるというまで

には至らず、その児童観も児童に完全な人権を認めるには至つていなかった。

敗戦によつてもたらされた社会経済の混乱は児童の生活状態に大きな影響を与えた。この当時の状態を代表するものに浮浪児問題があつた。政府は応急措置として浮浪児の発見と施設への収容を命じたが、さらに根本的施策を樹立するのを感じ昭和21年児童保護事業の強化徹底に関し、厚生大臣は中央社会事業委員会に児童保護法要綱案を諮問した。

昭和21年は新憲法が制定公布された年であり、この新憲法においては社会福祉の向上が国家の責任であることを明らかにし、福祉国家建設の理想をかかげた。この思想こそ、その後の児童福祉行政を進展させるのに役立ったのである。

昭和22年に中央社会事業委員会は、政府案よりはるかに積極的な児童福祉法要綱案を答申した。これを受けて政府は新憲法下の第一回の国会に児童福祉法案を提出したのである。

児童福祉法は、特殊な児童の保護に止まらず、さらに積極的にすべての児童の心身とも健やかに育成することを目的とした画期的な法律であつた。従来の児童虐待防止法、少年教護法を廃止して、これらの法規の保護的性格から脱し、積極的福祉の増進へと進んだもので福祉国家の取る児童福祉政策の色彩を強く打ち出したものといえる。<sup>1)</sup>と。

このように、児童福祉の問題は、わが国においては戦後、法令や施策の上でとくに問題にされはじめた。しかし、それにたいする一般のひとびとのうけとめかたや、主題の内容には、わが国固有の思考や理念が反映していることはいなめなかつた。福祉の問題が、その実施や遂行において、さまざまな矛盾を生ずるならば、それは、いわゆる理念的なスローガンが仮りもので、現実との十分な関連性をもちえていないからだといつてよいであろう。最悪のばあいには、その矛盾にすら気がつかないといつた悲劇が、われわれの周囲で繰り返されることになるのである。

しかしながら、このような風汐は、世界的な共通現象

註(1) 黒木利克：児童福祉事業概論，全国社会福祉協議会，1963，9頁。

であつて、われわれは、ある国の福祉を、その国民の伝統や、民族的潜在力や、文化の質の度合と併せて検討しなければならない。そのようにしなければ、福祉の問題は進展しえないといつてよいであろう。北欧の福祉国家といわれる国々においては、国家がまず政策を確立したからそのような国ができあがつたのではなくて、人々の間から高まつた関心が、国をしてそのような方策をうちださしめたところに意味があつたのである。「…これらの活動は、決して膨脹しつつある都会に限定されるものではなく、多くの事例において、農民たちが、パイオニアとしての顕著な役割を演じた。これらの新しい諸制度においては、その起源が、政府とともにではなくて、自発的な大衆の先導に基づいているという事実は、この発展の最も著しい局面であつて、多分、その後におこる社会福祉的計画に、永続的な影響を及ぼすような運命をもっているのである。」と、北欧五ヶ国（Denmark, Finland, Iceland, Norway, Sweden,）協同のもとにデンマークで出版された「自由と福祉（Freedom and Welfare）」<sup>2)</sup>では説明されている。いわゆる社会福祉——福祉一般という意味においても——とは、ある民族や、大衆の、一般的な意欲を基盤にしてのみ成立するものである。その基盤なしに、方策が成就することはありえず、またありえたとしても、それは空しい根なし草でしかない。政府が一時的に決定した法令や政策も、歴史の流れのうでで無用のものとなり果て、一般大衆と剥離してしまう結果になりかねないのである。だがそうだからといつて、われわれは、政府にたいして、全く何も期待しないというのではない。われわれの努力が政府を動かし、政府の方針がまたわれわれを一步前進せしめうるところに、真の福祉国家の方向がある。われわれは、いわゆる北欧の福祉国家といわれる国々において、その実現が、農民たちや一般大衆の熱意と支持から出発していることを知るの、きわめて意味深いことである。そしてその熱意や支持の先端に、政府の方策が確固たる位置を占めているということを学ぶのも、重要な問題だといわなければならないであろう。

アメリカの精神医学者レオ・カンナーは、その著「児童精神医学」の最初の部分<sup>3)</sup>で、児童に関する問題の歴史的概観をおこなっている。問題はアメリカに限定されているが、われわれは、彼の記述から、児童福祉の問題にも関連したきわめて興味ふかい意見をきくことができる。まずカンナーは、20世紀になつてから、児童に関する問題が、画期的な変貌をとげたことを指適し、20世紀

を10年毎に分類している。20世紀の最初の10年は、教育の義務化と、精神測定学の導入にともなうビネー・シモンテスト（いわゆる知能テスト）の成立の時期であつた。知能テストは、そののち何回か改訂され、児童の「精神年齢」を算出し、人間存在の不等質性を認識するのに役立つに至つた。次に、ダイナミックな精神医学の出現がある。クレペリン、フロイド、マイヤー等は、「精神病の人々」から「人々の精神病」の特徴的タイプを抽出し、「診断」「研究」というダイナミックな態度を確立した。そして問題は次第に子供それ自身の方向へ向けられ、「少年少女のための審判所」が開設された。非行をおかした少年や少女が、大人とは別のやり方で、あたたかい雰囲気の中、その行動や動機が考慮された。そしてなぜそのような行為に走つたかという原因が究明されるような企てがおこつた。そしてこのような運動は、精神衛生の動きにも結びつき、1909年には、ベアーズの努力で、ニューヨークに、精神衛生の全米委員会が開かれた。このように20世紀の最初の10年間は、まず「児童について（about）考える」ことすなわち「啓蒙」がはじまつた時期だといつてよい。カンナーは、これを「Thinking about children—Culture」と説明している。

次の10年間、すなわち20世紀の10年代は、精神衛生運動が精神病や非行の予防をスローガンにし、児童の成長期の問題がとりあげられはじめた時期である。児童の動機や要求を正しく理解する方法が、まじめに考えられた。施設や里親等の委託組織、知恵のおくれた子どもたちの特殊教育等が実現した。この時期は、「児童にたいして何かをする——機関（Doing things to children—Community）」の時期だといつてよい。

次の1920年代の10年間は、「日々の子どもの日々の問題」が考えられた時期である。児童のための「ガイダンス・クリニック」（指導施設）が1921年にボストンにつくられ、10年間に北米だけで500に達した。これらの施設は、子どもの態度が、実は両親や先生たちの態度と相関性をもっているものであることを明らかにした。1928年に出版されたウィックマンの著作は、学校の先生の態度の再教育の必要を説いている。ウィックマンは、生徒の情緒的体験的要素を認め、取扱う方法を、先生たちが身につけることを奨励している。「児童のなかにときどき発生する不従順、反抗、盗み、うそつき、無断欠席、性行動といった衝激に充分な対処ができるためには」「先生たち自身の情緒的社会的調整」がおこなわれるよ

(2) G. R. Nelson : Freedom and Welfare, Social Patterns in The Northern Countries of Europe, 1953. p.381f

(3) L. Kanner : Child Psychiatry. 3rd Edi. 1957, p. 3~16.

うに注意が払われねばならないのである。児童にたいして、両親や先生たちの態度の問題が注目されはじめたということは、児童に関する問題のひとつの発展であり児童の人格に関する問題の確立である。すでに1897年に成立していたいわゆる PTA 組織が、個々の児童を対象に、訪問教師の形態を生じたのはこの時期であり、カンナーは、これを「児童のために何かをする——家庭と学校 (Doing things for Children——Family and School)」の時期と説明している。

では次の10年、すなわち1930年代はどのようなものであろうか。児童が、家庭や学校という環境のなかでより快適に過すためのさまざまな工夫がなされた。一方、精神医学の立場では、患者が自らその症状にたちむかうという方向がとられ、精神医学者は患者の内部生活への洞察をもつことが要請された。児童精神医学の領域では、アンナ・フロイドによつて方向づけられた「遊戯」による子供の自己表現が重視されはじめた。児童は、情緒的に解放されることによつて、問題行動の治療が可能になるのである。1930年には、児童のための最初の終日の精神医学診療施設が、小児科病院の中心部に開設された。この時期は、情緒障害の子どもたちのために、指導施設が、家族関係を研究したり、両親や先生たちとともに建設的に仕事をしている点に特色がある。そしてそれは、ほんとうに子どもたちのためのものであり、次の10年の間に展開するであろう方法が、子どもを治療的計画のなかで、人格的に包括することが期待されている。この時期をカンナーは「児童とともに仕事をする——児童そのもの (Working with Children — Child)」として特徴づけている。このようなカンナーの論述は、1935年にアメリカで書かれたものであり、当時のアメリカの児童問題が、精神医学の立場から浮彫りにされているわけである。だがしかしそののち30年以上を経過した現在でも、われわれは、この次に来るべき問題が十分に解明されたかどうかという点に関して甚だしく疑問を感じざるをえない。それはアメリカにおいても、またわが国においても同様であろう。カンナーの説いた「児童とともに」という方向は、今日においても志向されつつあるが、十分な方法が確立されたとはいえない。われわれは、カンナーの提出した問題点のなかで、今日なお幾多の努力をくりかえしている現状だといつてよいであろう。

現在、世界各国で、児童福祉の問題がやかましく取りあげられ、わが国においても、児童福祉法の制定以来、児童福祉の問題が国の施策のひとつとしてとり扱われるにいたつたことはすでに述べた。20世紀になつて、

児童の問題が、たんなる大人の未完成な段階の問題としてではなく、独自の意味と課題をもつたことがらとしてひとびとの関心をひくようになったということについても以前に論じた<sup>4)</sup>。その結果、小児科学や精神医学、心理学、教育学、文化問題等の各分野が統合され、ひろく社会的な問題意識が発生しはじめた。すなわち生きた人間としての児童を取りあげるという姿勢ができあがりかけたといつてよいのである。それが国の施策や社会構造とも密接な関連をもつとき福祉という立場が成立するのである。しかしながら、わが国において、そのような児童福祉の多くの問題は、目下のところ山積しているにもかかわらず、その対策や実行は未だ模索の状態である。そのなかから、どのような立場や方法が確立されるべきであるのかがまさに問題なのである。

## (2)

児童福祉の問題は、如上の通り、20世紀に至つてとくに著しい発展をみせている。

そしてその関心は、近代の人間性の確立という理念のもとでおこなわれたといつてよい。そして児童の問題は、近代の人間性の問題の一部でありながら、その人間性の問題を内部からゆりうごかし、主導権を握るような問題として、登場した。医学や精神医学や心理学や教育学が、その問題のなかに児童の問題をめざましくとりこんでおり、逆に児童の問題から多くの啓発をうけていることは、児童に関する主題の重要性を示すものであろう。しかも児童の問題は、たんなる思弁的な、抽象的な問題にとどまらず、具体的な現実的な問題として、われわれに迫つてくるとき、常にほんとうの生きた問題になつていく。われわれは、その生きた問題の把握のしかたを最も現代的な要請において理解せざるをえないのである。それは、個人をたんに純粋な個人それ自体として把握すると同時に、その存在性を、その個人が属している社会の「世界内存在」として認識する立場である。そしてその個人は、他者との相関において、有限な生の時間の一回性を、全く生かしめられるべきであるという考え方である。しかもそれは、単なる観念的抽象の問題としてではなく、具体的な現実の社会的場面の問題として考察されねばならないのである。したがつて社会構造や政治体制が考慮のうちにとりいれられる。そしてそれらの諸連合のなかで、個人の問題が新たな関心の対象となつて登場するのである。このような人間観を、われわれは福祉の立場と名づけ、最も現代的な問題把握の態度として規定したい。そしてそのことが福祉の実践性を規定するものと考えたいのである。もとより現代においては、人間を

(4) 拙稿：児童芸術研究の基礎的課題，京都府立大学紀要，1962．63頁～70頁

対象とする諸科学にあつて、実践性をなおざりにすることは許されないであろう。しかしながら、最も純粋な意味において、常に実践性が問題と密接な関連をもつという立場は、福祉によつて代表されるとみることが妥当なのである。

そのような立場から、児童の問題について考察すると、現代のさまざまな諸科学を統合し、児童に関する方向を最も現実にそくしたしかたで、すなわち国の政策や社会機構に働きかけつつ、それとの密接な関連においておしすすめていくのは、児童福祉の立場だということになる。われわれは、ある問題を発見したとき、それを直ちに何らかの未来へ向う方向のもとに位置づけたいと願う。それを社会の現実場面であたうるかぎり遂行する可能性を内包するのが、福祉の立場だといつてよいのである。児童心理や児童精神医学の発見した問題、教育の直面する現実、社会学が提供する問題、そのような幾多の問題をふまえてつづその次の段階において、それにたいする改善の対策が強力に判断の対象となることこそ、福祉の立場であり、福祉の存在理由でもある。したがつて、児童福祉にとつて提供されている問題は、数限りがない。そしてそれにたいしてとられるべき対策も無限である。しかも無限であるということは、態度決定において無尽の自由な撰択の予定を意味する。一定の規準のもとに、問題解決を企図しえない人間のための科学は、無限の深淵の縁に臨むごとく、きわめて多くの危機性を蔵しているのである。

児童問題は、20世紀にはいつてめざましい進歩をとげているが、その進展の方向についても反省してみなければならない。カンナーも述べているように、いわゆる知能テストの流行による知能指数の重視の傾向などは、わが国においても、幾多の問題を提供している。精神年齢の算定と知能指数による発達段階の決定は、優秀児・普通児・精神薄弱児というようなレッテルを用意しかねない。そして知能テストによつて測定される以外の、人間の諸能力の軽視を助長している。ビネー・シモンによつて制作された知能テストは、アメリカで知能指数を算出する方法にまで改訂されたが、いわゆる精神年齢という抽象化のおしつけ以上の罪咎を生じている。暦年齢 (Chronological Age=CA) が10才であれば、精神年齢 (Mental Age=MA) が10才であるとき、知能指数 (Intelligence Quotient=IQ) は100である。すなわち  $\frac{MA}{CA} \times 100 = IQ$  という算定法に従っているからである。このような方法がとられているため、CA10才の子どもは、MAが14才のとき、IQ140で優秀児、それ以上は

天才と称せられる。CA10才でMA8才のときはIQ80で境界線児、それ以下は精神薄弱児と称される。そして、CA8才で、MA8才の児童より劣っているとレッテルが貼られるのである。たしかに、漸進的に発達すべき児童においては、CA8才MA8才の子どもに比べて、CA10才MA8才の子どものほうが劣っているであろう。しかしながら、MAが8才でも、CAが10才の子どもは、CAが8才の子どもとはことなつた生活経験の慣れをもっている。そしてその生活経験からくる何ものかを身につけているのである。これは精神薄弱児を観察していると、発見することができる。また3才児というような、不安定な、人格形成期の子どもたちの絵画において、われわれは、CAが低ければMAがいかに高くとも、画面が制約されることを発見することができる<sup>5)</sup>。われわれは、ともするとこのような点を見逃しがちである。われわれは、子どもたちの生活経験と、それを通して考察される人間性といったものに目をむけなければならない。その人間性は、別様のいいかたをすれば、感性を基盤にした人間の生地のあるかたということもできる。ある意味では、知能すらもそれによつて支えるような、根柢的な人間存在の本来性といつたほうがよいかもしれない。そしてそのような本来性は、各個人によつてごく年令の小さい頃から相異しており、特殊なものとして考察の対象になるのである。

児童福祉の問題は、年令の上からは、満18歳以下である。それは児童福祉法にも規定されており、多くの人々がこの年令を基準にしている。しかしながら0才から満18才までという時期は、人間の発達にとつてその特徴が最も顕著なときであり、一律には論じられないものがある。われわれは幾多の段階に応じて、児童の問題をさまざまな角度から検討する必要がある。そしてそのさい、感性的なものを基調にする人間のありかたへの洞察が、あらゆる児童の問題にとつて最も重要であり、その点への注目こそ肝要だと考えられるのである。

われわれは、カンナーの論述においても、「感情」や「情緒的なもの」「子供の自己自身の表現」といつたことばで、この問題を見出すことができる。しかしながら、それらのことばも、20世紀の第3番目の10年間すなわち1920年代の記述にはじめて登場している。児童のための「ガイダンス・クリニック (指導施設)」が開設されたのち、親や先生たちの児童にたいする態度として、生徒の「情緒的、体験的要素」を認め、取扱うという工夫が推薦された。そしてこの方向が、次の10年間すなわち「児童とともに」の時期にまで影響しているのでは

(5) 拙稿：三才児の絵画に関する一考察。京都府立大学紀要、1964。81頁～91頁

る。そして情緒障害の子どもたちを、遊戯によつて治療しようという試みに関する説明に関連しているのである。「知能的なもの」ではなく、「情緒的なもの」「体験的なもの」を重視しようということは、児童を生きた人間として把握しようという企ての表明といつてよいであろう。それはわれわれが、「感性的なもの」と名づけた問題と軌を一にしている。児童福祉においては、この点への注目なしに、問題を展開することができない。児童は発達途上にあつて、常に、生き生きとした人間であり、純粋な生活体験を営んでいる。理論や概念化を身につける以前の状態において児童を把握するとき、われわれはどうしても、児童の感性の問題に突き当らざるをえないのである。そしてその問題こそ、カンナーが「児童とともに」—— with children と述べた点の内容的側面を構成するといつてよいと思われる。われわれは、以下において、その感性の問題について考察してみよう。

### (3)

人間の諸能力の一としての「感性的なもの」に対する注目は、近世にはいつてからさまざまな形態で考察されている。種々の哲学的な関心のなかからいわゆる「感性の学」<sup>(6)</sup>としての美学が成立したのも、近世の重要なできごとであつた。われわれは、カントいらい、美や芸術の問題を純粋理性や実践理性の中間項として、独自の領域において考察することに慣れている。クライスによれば、この発見はカントによつて「美的ではなくて体系的な問題」であつたが、だからといつてそれはただたんに「カントの外面的図式的要求」<sup>(7)</sup>にとどまるものでもないのである。われわれはむしろ、先験論的な批判体系におけるカントの立場のなかから出発している美的なもの独自の領域を、現代の問題として基礎づけ解明する方向を見出さなくてはならない。

すでに述べたごとく、児童の問題においては、人間の本来的なありかたや理性概念によつては究明しえない面がきわめて多い。われわれは理屈や理論で割り切れないものを、児童に関する問題のなかでしばしば発見する。そのようなものを正しく把握し、それが十分に生かされるような理論の再構成を期待するためには、われわれは、児童問題において、児童のもっている感性的なものと、それを理解する働きを共通の場で基礎づける努力が必要である。感性という場を中心に、児童福祉の問題は、児童も、それに関係するひとびとも、ともに生かされる必要があるのである。

児童福祉のさまざまな分野のなかでは、近年、このよ

うな問題を除外することができなくなつて、いろいろな形で児童の感性がとりあげられている。児童福祉の問題では、普通児もハンディキャップをもつた子どももふくめて考察の対象になつてはいるが、普通児はもちろんのこと、とくにハンディキャップをもつた子どもたちにおいては、さまざまな点で児童の感性を大切にしなければ、福祉自体のもつ意味が失われてしまうところにまで到達しているのである。さいきんとくに注目されている情緒障害児短期治療施設は、文字通り、問題児を情緒の障害という面から把握しているわけであり、このような見方の成立は、こんごますます確立されることと思われる。もつとも、情緒障害児短期治療施設のばあいは、対象児は12才までに限定されているが、それ以上の年令で、たとえば教護院に人所している非行児などにも、情緒障害の問題把握は必要なことである。児童にたいする治療法としておこなわれるプレイセラピー（遊戯療法）も、児童の感性——情緒・感情といったものを解放し、人間性を確立するところにその意味があることは論をまたない。このように考えると、われわれは、児童における感性的なものを認めるという意識の確立と、その確立を裏づける見方の成立を急ぐ必要を感じる。児童のなかにあるあふれるばかりの感性のゆたかさが、ひきだされることなく、おしつぶされ、ゆがめられていくことを児童に関係をもつひとびとが助長しているとすれば、それこそ一大事である。そうでなくても自由にのびにくい児童には、社会すべての人びとが、感性的なものを大切にする姿勢をもつことがのぞましい。しかし、たまたまそのようなことが望めないで、いろいろな問題が生じたときには、せめて直接に児童福祉にたずさわっている人びとの間にだけでも、児童を育て導くとりくみのなかに、この点への絶大な関心が欲しいのである。

一般の学校教育においても、読み書き算数といった知的作業にともなつて、人間性を豊かにする方法が、もつと考慮される必要があるが、児童福祉の施設では、何よりも児童を生きた人間として成長させる基盤として、感性の問題が取扱われねばならない。乳児院から保育所、精神薄弱児施設、股体不自由児施設、盲・聾児のための施設、虚弱児施設、養護院、教護院、情緒障害児短期治療施設、いづれを考へても、根本的な児童の問題を感性和結びつけて考えることなしには、その存在意味も成立しないと思われる。母子寮のようなばあい、里親制度などにおいても、親と子の関係として中心的な問題は、この点に縮られねばならないであろう。

(6) Baumgarten : Aesthetica, 1850.

(7) F.Kreis : Autonomie des Ästhetischen in den neueren Philosophie, 1922, S. 24f.

児童にたいする「mitleben」ということを説かれる糸賀一雄氏はその著「精薄児の実態と課題」のなかで次のようなことを述べていられる。すなわち「したがって生活におけるこのような精神の柔軟性こそ問題である。ふつうの家庭であつても、特別に意識的になることもなく、自由なあたたかい雰囲気があつて、その中で幼い精神はしだいに「しつけ」られてゆくべきであつて、基盤となるものは「しつけ」をうけ入れさせる安定した、信頼にみちた人間関係である。このような人間関係の中で、われわれの精神は、柔軟性を獲得して、他の生活面におけるきびしい訓練に耐えさせもし、むしろよろこんでそれを受けようにもなるのである。

原理的にいえば、生活指導の基本は、まず、情緒の安定である。それは庇護され、承認されるということによつてもたらされるのであるが、そのような安定性は、われわれの施設のような、ハンディキャップをもつた子どもたちには、どんなに重視してもしすぎることはない。新しい経験への欲求とか、自主性といった積極的な意欲にしても、情緒の安定の上にきづくのでなければ、健全なパーソナリティーの形成というわけにゆかないであろう。生活の面での指導と作業現場での訓練とは、即自的でなく、むしろ対自的な関係で内面的に結びつくのであ

る。」<sup>(8)</sup>と。このような態度は、精神薄弱児以外の子どもたちにも共通に要請されるものである。感性こそ「しつけ」や「教育」のすべての基礎でなければならない。

われわれは、ここに児童福祉における感性の問題が、それを基盤とすることによつて、その対象児、関係するひとびとのすべてを包括する新しい場として登場することを確認するものである。もちろんクライスもいつているように、「…まだどのような文化においても、この自律性は、純粋な形式において実現されていない…」<sup>(9)</sup>ものであろうが、われわれは、現代において、児童福祉の問題が、きわめて重要な意味をもっていることに思いをひそめるとき、まさに児童問題における感性の問題の自律こそ、最も中心となるべき課題と考えなければならないであろう。それこそ、カンナーが述べている「児童とともに」(with children)の内容的な基礎づけであるともいえるのである。

われわれは実践の学としての福祉学が、立場と方法を確立するために、解決しなければならない多くの問題のなかで、当面の課題として、近年注目されはじめつついまだ主導的な方向が見出されているといい難いこの感性の問題をこんごとも追求しなければならないのである。

(8) 糸賀一雄：精薄児の実態と課題，関書院，1956，172f.

(9) F. Kreis : op. cit. S. 5.